



三珠中学校校長室だより
令和7年11月21日発行
No.32
文責 校長 渡邊 康裕

三珠中HPはこちら！



町制施行20周年記念事業

12. 22. 笠井千晶氏講演会

来る12月22日(月)午後2時15分より、市川三郷町生涯学習センター(i f センター)において



町内4中学校の全中学生を対象に、市川三郷町出身のドキュメンタリー監督・笠井千晶氏による講演会が開かれることになりました。演題は『映像で世界とつながる』—市川三郷町の中学生がドキュメンタリー監督になるまで—です。

▼修学旅行や県内めぐり、町内めぐりを行う前には必ず事前学習を行います。それは深い学びにつながるからです。せっかくの貴重な機会ですので、学校便りを通して、笠井千晶氏についての事前学習をしましょう。▼まずは笠井千晶氏のこれまでの生い立ちを紹介します。《幼少期～中学・高校時代》地元六郷の幼稚園・小学校・中学校に通う。子どもの頃は書道や図画工作、手芸、お菓子作りが好きなおとなしい子どもだった。中学に入るとラジオから流れてくる洋楽を通して英語に興味をもつと同時に海外にも興味をもつようになった。



市川高校英語科に進学。塾には通わず、自分で計画を立ててする勉強が好きだった。世界史の教科書に出てくる歴史的建造物などを見ながら、「将来、自立したら世界遺産を巡ろう」などと

考え始める。《大学時代／ドイツ留学》高校卒業後、お茶の水大学に進学。大学3年時、1年休学してドイツに留学。寮生活を送っていた語学学校で、クラスメイト間の人種差別や、同年代の若者の徴兵制の現実を目の当たりにする。また、東欧の混乱から逃れた亡命者、内戦中のアフリカからの労働者に



出会うなど、各地の紛争の^{じか}実情を身近な人を通して直に知る機会をもつ。語学学校の合間にはリュック一つの一人旅をして、ヨーロッパ各国を見て回る。中でもドイツやポーランドに残

る、第二次世界大戦時中のユダヤ人虐殺の史跡などをよく訪ねて歩いた。このドイツ留学の経験により、世界の様々な場所へ行って実情を伝えるメディアの仕事に興味をもつようになった。《社会人生活／アメリカ留学》大学卒業後SBS静岡放送に入社。報道記者となり警察取材の経験を積む。深夜早朝を問わず事件や事故の現場にかけつけるという仕事一色の日々を送るが、徐々に



ニュースを深く掘り下げるドキュメンタリー番組の制作に興味をもつようになる。静岡放送を退社し、ニューヨークへ留学。ニューヨーク大学の社会人コースでドキュメンタリー制作について学ぶ。帰国後、名古屋



屋の中京テレビで働き始める。《中京テレビ勤務～独立・起業》中京テレビでは静岡放送時代と同じ報道の仕事に携わり、夕方のニュース番組の他、ドキュメンタリー番組の取材・制作を担当。名古屋に移って3年余り経った2011年3月、東日本大震災が発生。週末の休みを利用して、一人で東北の被災地に毎週のように足を運び、現地の生の声を記録し始める。本業のテレビと、プライベートの取材・撮影の二足のわらじで3年余りを過ごした頃、プライベートの記録を続けることを優先しようと決意する。中京テレビを辞めてフリーランス(会社に雇われず、一人で仕事をする人)として独立する。会社を辞め、1年半ほどの準備期間を経て本格的に起業。Rain field Production(レイン フィールド プロダクション)という会社名でドキュメンタリー専門の映像制作活動を開始。映像作品の企画立案から、取材・撮影・編集まですべてを自分自身で手がけ、テレビやインターネットなどで作品を発表している。▼市川三郷町出身の笠井千晶氏は以上の様な経歴の持ち主です。ちなみにテレビ局の報道記者として15年間もの長い期間、勤務しています。最後に、これまでの笠井千晶氏の受賞歴を紹介します。



2004年度 日本民間放送連盟賞 テレビ報道番組部門最優秀賞▶SBSスペシャル『宣告の果て～確定死刑囚 袴田巖の38年～』: この番組は、笠井千晶氏がSBS静岡放送で、初めて手がけたドキュメンタリー番組です。袴田事件*で死刑が確定した袴田巖さんが、(裏面へ続く)

2004年度 日本民間放送連盟賞 テレビ報道番組部門最優秀賞▶SBSスペシャル『宣告の果て～確定死刑囚 袴田巖の38年～』: この番組は、笠井千晶氏がSBS静岡放送で、初めて手がけたドキュメンタリー番組です。袴田事件*で死刑が確定した袴田巖さんが、(裏面へ続く)

死刑囚として、「いつ死刑が執行されるのか……」とおびえながら過ごした長期間の獄中生活と、それとともなう精神的な移り変わりを追った作品です。

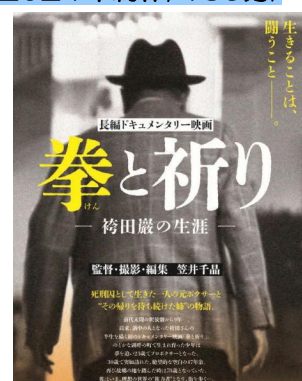
***袴田事件とは……**1966年6月30日未明、元プロボクサーの袴田巖さんが30歳の時、住み込みで働いていた静岡県清水市(現：静岡市清水区)の味噌製造会社で事件は起きました。会社の専務一家の4人が刃物で刺されて殺害され、家が放火されるという強盗殺人放火事件でした。▼巖さんは容疑をかけられ逮捕されますが裁判では一貫して「無罪」を主張します。しかし、44歳となった1980年に最高裁で死刑が確定します。翌年、巖さんは裁判のやり直しを求めて「再審請求」の訴えを起し、事件から47年7ヶ月経過した2014年3月、静岡地裁は再審開始を決定、同時に巖さんの刑の執行を停止し死刑囚という立場のまま釈放します。この時、巖さんは既に78歳になっていました。その後、2024年9月、静岡地裁は無罪判決を言い渡し、同10月、検察官が上訴権(判決への不服申し立ての権利)を放棄したことにより、巖さんの無罪判決が確定しました。▼事件を巡っては取り調べなどの捜査手法(拷問まがいの取り調べ)や警察が示した物証への数々の疑問が指摘されました。そのうち最大の争点となったのが犯行着衣とされた「5点の衣類」です。事件発生から1年2ヶ月が過ぎた裁判の最中、事件のあった会社の工場で突然、味噌タンクの中から血まみれの「5点の衣類(ブリーフ・ステテコ・半袖シャツ・長袖スポーツシャツ・ズボン)」が発見されます。検察は当初、巖さんが「パジャマ」を着て犯行に及んだと主張していましたが、一転、この5点の衣類が犯行着衣だと主張を変えます。ところがズボンについて裁判所で装着実験を行ったところ、巖さんには小さすぎて履けなかったのです。さらに半袖シャツについて、「犯人である巖さんのものだ」と裁判所が認定していた血痕を弁護士側推薦の法医学者がDNA鑑定したところ、巖さんのDNA型とは「一致しない」という結論になりました。これらより警察による「証拠のねつ造」を裁判所が認め、再審開始となったのでした。

2010年度 石橋湛山記念 早稲田ジャーナリズム大賞奨励賞▶NNNドキュメント2009 法服の枷〜沈黙を破った裁判官たち〜：この作品は、「裁判官



の世界ほど、国民に閑置されているものはない」とされる司法界の密室性と、その中で葛藤する裁判官たちの実態を、勇気ある告発に基づいて描いたドキュメンタリーとして高く評価されました。**2018年 第5回 山本美香記念国際ジャーナリスト賞▶長編映画作品『Life 生きてゆく』(2017年制作/115分)**：この作品は、

➤原発事故の報道の陰に隠れてしまった、津波被害を受けた人々の深い悲しみと、静かな戦いが描かれています。東日本大震災に見舞われた福島県沿岸部では、原発事故が起きてしまったため、津波に遭った人々の救助や捜索は行われず、その犠牲者にも目が向けられなくなっていきます。放射能汚染の陰に、津波で失われた多くの命がある……。行方不明になった幼い2人の我が子を探し続ける夫婦の5年半を追った、悲しみと再生の物語です。**2019年 第26回 小学館ノンフィクション大賞▶書籍『家族写真3.11原発事故と忘れられた津波』**：この作品は、東日本大震災の際に福島県南相馬市で津波により家族を失い、さらには、原発事故による警戒区域設定によって捜索が困難になった人々の7年間にわたる現実を、丹念な取材に基づいて描いたものです。**2024年 第4回米ピッツバーグ大学日本ドキュメンタリー映画賞▶長編映画作品『拳と祈り 一袴田巖の生涯〜』(2024年制作/159分)**：



この映画は、日本の司法上最長の死刑確定者であった袴田巖さんと、その無実を信じ続けた姉の秀子さんの、およそ22年間にわたる闘いの奇跡を追った長編ドキュメンタリーです。袴田さんが元プロボクサーであったことから、タイトルには「拳」、そして、弟の無実を訴え続けた姉の姿から「祈り」という言葉が使われています。「この映画は、『袴田事件の映画』ではなく、一人の人としての『袴田さんの映画』にすることによって、社会で困難を抱えるすべての人に、明日を生きる



る勇気を与えてくれる物語になるはずです。」と制作者・笠井千晶氏は語っています。▼これら受賞作の内容からも、笠井千晶氏は、社会的な困難を抱える人たちと向き合い、ゆっくりと信頼関係を築きながら、その方たちの心の奥に光を当てることを大切に、映像制作に取り組んでいます。▼講演会当日は、笠井千晶氏への質問コーナーが設けられる予定になっています。その際には、これまでの笠井千晶氏の生き方や、様々な作品の制作に関わって笠井氏に聞いてみたいことなど、三珠中生徒から積極的な質問が出ることを期待しています！